

島のむんがたり

徳之島町の考古学事始め

徳之島には、伊仙町にある国指定史跡の徳之島カムイヤキ陶器窯跡や面縄貝塚群、最近話題となっている天城町のウンブキ水中鍾乳洞などの遺跡があります。徳之島町内の発掘調査の例は少ないものの、遺跡は存在します。徳之島町内で、最初に遺跡の調査が行われたのはいつで、誰が行なったのでしょうか。

その答えとして、現在の伊仙町出身で鹿児島朝日新聞（現在の南日本新聞）の記者だった廣瀬祐良（ひろせゆうりょう）さんが、入墨の調査のため来島していた早稲田大学の学生、小原一夫（おばらかずお）さんと、1931年2月に本川貝塚、亀津中学校付近にあ



廣瀬祐良氏

る亀津貝塚（現在は美代願山）（みょうがんやま）の発掘調査を行いました。現在の考古学上の成果に照らし合わせると、いずれも古墳時代ごろの遺跡と考えられています。また、尾母集落のある家で保管されていたカムイヤキを借用して島外の研究者に年代の鑑定を依頼し、鑑定結果を踏まえて中世のもの

と特定しました。廣瀬さんは、考古学以外にも民俗学、人類学、文献史学を独学で勉強し、自身が小学校の先生をしていたこともあり、郷土史をどのようにして学校の教育に取り入れるかを考えていました。自らが徳之島で調査した成果を『昭和八年度調査 郷土史研究 徳之島ノ部』としてまとめました。その中で、奄美諸島の社会的な特徴や島民の気質がどのようにして生まれ、たかを理解した上で、教育を行うことが重要と記しています。地域の様々な実

情を理解した上で教育を実践するという考え方は、現在にも通じるものではないでしょうか。

戦前は、大学や研究機関が少なく、亀津貝塚と本川貝塚の資料については、鹿児島県出身の帝国陸軍大将大山巖の息子、大山柏が自費で開設した大山史前学研究所で詳細な研究が行われる予定でした。研究途中ですが、本川貝塚のものについては、伊仙町面縄貝塚で発掘された資料と比較されました。しかし、1945年3月10日の東京大空襲により跡形もなく焼失してしまい、その成果は謎のままとなってしまいました。

（郷土資料館 大屋 匡史）

問 郷土資料館

☎0997-82-2908

